

「見ること」を楽しむ、 「ものの見方」を鍛える4冊

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載。
今回のご担当は、渡辺光輝先生（お茶の水女子大学附属中学校教諭）です。

「君は『最後の晩餐』を知っているか」は生徒に大人気の教材です。私はいつもこの発問から授業を始めます。「どこにユダはいますか？」と。ダ・ヴィンチのことですから、周到に絵に仕掛けをしています。それに生徒は気づくことができますか？ そんな絵画の知識を得ることができたのが『マリアのウイंक』でした。さりげなく描かれたものに象徴的な意味が込められていることを知り、作品を見る楽しさを倍増させることができました。

教科書には「ちょっと立ち止まって」や広告など「見ること」がカギとなる教材はたくさんありますが、広告を扱った本でイチ押しは『何度も読みたい広告コピー』です。とくに「物語型」の広告では、たった一枚のポスターから、ほろっとしたりクスッと笑った

り、短編映画を見終わったかのような充実感が得られる広告が紹介されています。コピーライターが「こういう意図でビジュアルや言葉を選んだ」という種明かしをしているのもおすすめです。

「見ること」の楽しさを引き出す活動に「対話型鑑賞」があります。この活動でファシリテーターは四つの質問を投げかけるそうです。「作品の中でみつけたこと、気づいたこと、考えたこと、疑問でも何でもいいので話していきましょう」「どこからそう思う？」「他にはありますか？」「そこからどう思う？」と、選りすぐりのこの問いかけを切り口に、「見え方」を重ね合わせ、理解を深めていきます。詳しくは『教えない授業』を読めば、「見ること」が、深い学びとどうつながるか理解することができましょう。

『イメージと意味の本』では、絵や言葉などの「記号」から人どのように意味づけをしていくか、さまざまな視点から解説しています。ページには写真とともに「ものの見方」を鋭くえぐる筆者からの問いが添えられています。この問いに答えることで、読み手の固定概念はぐらぐらと揺さぶられていきます。「ものの見方」をストレッチするのに役立つような一冊です。



お茶の水女子大学附属中学校教諭

わたなべこうき
渡辺光輝

1976年、千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。
共著書に『学習用語で深まる国語の授業：小学校・中学校：実践と用語解説』（東洋館出版）など。

BOOK GUIDE

教えない授業

美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方

鈴木有紀 著
英治出版／2019年

筆者は愛媛県美術館の学芸員。学校と協働でさまざまな教科の学習に「対話型鑑賞」を活用するプロジェクトに取り組む。この本では「対話型鑑賞」の具体的な手順やファシリテーションの方法などを詳しく説明している。



マリアのウイंक ——聖書の名シーン集

視覚デザイン研究所 編／1995年

西洋絵画の中で聖書の場面をモチーフとした作品を取り上げながら、聖書の各シーンについて解説。味のある手書きのイラストが添えられており、キリスト教について全く知識がない人でも楽しめる。

イメージと意味の本

記号を読み解くトレーニングブック

ショーン・ホール 著 前田茂 訳
フィルムアート社／2013年

画像や言葉から、人はどのようにしてイメージをもち、意味付けしていくか、クイズ形式で筆者が問いかけ、掘り下げて解説している。記号学の世界を体感できる。



何度も読みたい広告コピー

パイ インターナショナル／2013年

名作広告を「顧客目線型」「企業・商品メッセージ型」「第三者型」「物語型」に分類して紹介。ビジュアルとコピー（言葉）と両方楽しめる。コピーライターが自作の制作意図を解説しているのも興味深い。